

要旨

【研究の背景】分娩介助に魅了される助産師が多い一方で、「お産が怖い」と発言する助産師は存在する。助産師は産婦に寄り添い共感的に関わることで、新生児の深刻な状況や産婦の急変などの産科的ハイリスク状況に陥った時に、心的外傷体験を経験する可能性があるが、本邦における助産師の心的外傷体験の詳細は報告されていない。

【目的】本研究の目的は、助産師の産科的ハイリスク体験の頻度と、助産師の心的外傷体験の実態を明らかにし、その心的外傷体験後の PTSD 発症のリスクやレジリエンス、心的外傷後成長度との関連を探索することである。

【方法】本研究は、混合研究法による自己記入式質問紙を用いた横断的記述的研究である。データ収集期間は 2014 年 7 月から 10 月で、対象は全国の周産期関連施設から、層別化無作為割り付け法で抽出した 308 施設 1,198 名の助産師に質問紙を郵送した。量的データは統計的分析手法を用い、質的データは、KJ 法を用いてカテゴリを抽出した。そして得られたカテゴリと各変数との関連を探索した。

【結果】有効回答者は 140 施設に勤務する 681 名であった（有効回収率 56.8%）。産科的ハイリスク体験として、「よくある」または「時々」を合わせて 8 割を超えた項目は、緊急帝王切開、人工妊娠中絶、弛緩出血、胎児機能不全であった。心が傷ついた体験を記述した者は 575 名(84.4%)で、その内容は「周産期特有の子どもや母親の危機的な状況」「助産師としての揺らぎ」「対象者の悲しみとその光景」「自分に向けられた不本意な発言や苛酷な環境」の 4 つに分類された。575 名のうち、PTSD ハイリスク群に分類される IES-R 得点 25 点以上の者は 79 名(13.7%)で、その平均値がもっとも高い体験は「自分に向けられた不本意な発言や苛酷な環境」であり、心的外傷後成長度がもっとも低い体験でもあった。また 575 名のうち、「勤務していた施設からの退職を考えた」助産師は 86 名(15.0%)であった。そして心的外傷体験をした助産師にとって人的サポートは、PTSD や心的外傷後成長度、およびレジリエンスや就業意欲にも影響を与えていた。

【考察】本研究で得られた結果から現場への適応の示唆として、1. 助産師の心的外傷体験の啓発と教育を推進すること、2. 現場におけるサポート体制の強化があげられた。

【結論】84.4%の助産師が心的外傷体験をし、そのうち 13.7%が PTSD ハイリスク群で、15.0%が退職を検討していた。そして、PTSD とサポート得点は負の関係が認められた。また、助産師は心的外傷体験を経験していると同時に、心的外傷後成長も認められた。